

やさしい文章表現法 中西一弘

○おいしさを言葉で伝える工夫

- ・「おいしい」と書かずにおいしさを伝えよう。「大好きだ」と書かずに、好きで好きでたまらない様子を伝える工夫をしよう。
- ・「なんとも言えない」、「言葉で言い表せない」は禁句である。適当な言葉に逃げないで、「この言葉こそ」と言えるものを探し出す。なんとかして、言葉で表す努力をしてみよう。
- ・決まり文句（「雪のように白い」、「ほくほく顔」、「ほっぺたが落ちるようだ」など）は避けて、自分の言葉を見つける。
- ・五官（視・聴・臭・味・触）を働かせて、正確に描写しよう。色、大きさ、音、匂い・味の種類、触れた感じなどを、読み手が思い浮かべることが出来るように、客観的に表そう。
- ・「多い」「大きい」「厚い」「軽い」「高い」なども、なるべく具体的な数字で示すようにする。主観的な把握よりも、読み手と共通のスケールを使って数値で表示する方が正確に伝わる。
- ・食べる場所、時間、一緒に食べる人、調理方法など、その場の状況を描き出すことも「おいしさ」を引き立てる重要な要素となる。

○人物を描くときの注意点

- ・読み手の脳裏にその人物のイメージがはっきりと浮かぶように書くことが目標である。照れ屋なところ、頑固なところ、恥ずかしがり屋なところなど、その人物の性格や人柄を、日常のエピソードや習慣的な行為、表情や動作（会話を含む）を描くことで読み手に伝える。
- ・得意なこと、不得意なこと、身ぶりや態度、ことばぐせ、洋服の好み、趣味などを描いて、客観的に人物を描き出そう。
- ・身近な人物の場合、得てして主観的な感情に流されがちであるが、「好きだ」「嫌いだ」「似ている」「なりたくない」といった書き手の印象ばかり書いても、人物そのものを読み手に伝えることにはならない。どこが好きで、嫌いなどところはどんなところか。対象の人物そのものを描き出すのである。本文に書かれた事柄をとおして、読み手が、書き手の感情を自ずと理解すれば、その文章は成功したと言える。

○文末が単調になりやすい

日本語では、通常の文の終わり方の種類が限られている。そこから文章が単調になりがちである。文末に変化をつけるためには、ある程度の工夫が必要である。

作品例の文末を取り出して見てみよう。リズムカルに書けていないだろうか。すでに学んだように、豊かに動詞を使いこなすことに加えて、倒置や省略、体言止め、否定法、推量など、あれこれ工夫を凝らして、文末に変化をつけてみよう。単調な文章は、幼稚な印象を与えると同時に、読み手を飽きさせて最後まで読み進める気力を奪ってしまう。

○極力無駄を省く

思われる、感じられる、うかがわれる、ではないだろうか、ではないだろうかとおもわれる、といった曖昧でぼかすような言葉づかいは避けて、できるだけ直裁簡明につづるように心がけよう。

○最愛の女性へのプロポーズ 芥川龍之介

文ちゃん。

ぼくはまだこの海岸で、本を読んだり原稿を書いたりして暮らしています。いつ頃うちへ帰るか、それはまだ、はっきりわかりません……

文ちゃんを貰いたいという事を、ぼくが兄さんに話してから何年になるでしょう（こんな事を文ちゃんにあげる手紙に書いていいものかどうか、知りません）。貰いたい理由は、たったひとつあるきりです。そうして、その理由は、ぼくが文ちゃんが好きだと云うことです。もちろん、昔から好きでした。今も好きです……

僕のやっている商売は、今の日本で一番金にならない商売です。そのうえ、僕自身もろくに金はありません。ですから、生活の程度から云えば、いつまでたっても知れたものです。それから、僕は、からだもあたまも、あまり上等に出来上がっていません（あたまの方はそれでもまだ少しは自信があります）。うちには、父、母、伯母と、年寄りが三人います。それでよければ、来てください。

僕は文ちゃん自身の口から、かざり気のない返事を聞きたいと思っています。繰り返して書きますが、理由は一つしかありません。僕は文ちゃんが好きです。それだけでよければ、来て下さい。

このとき芥川龍之介は二十五歳で、東京帝国大学英文科を卒業したばかり。この手紙の相手の塚本文は十七歳で、跡見女学校の生徒だった。